



BEGINNING NOVELS

セックス & Sex and Dungeon ダンジョン!!

我が家の地下に、
H回数=レベルの
ダンジョンが出現した!?

小説・ミンカンスキー
Story by Minakaneki
イラスト・小山内
Illustration by Ootani

試し読み版

Kill Time Communication Presents

“Sex and Dungeon”

Story by Minkansukii

Illustration by Osanai

Contents

| | | | |
|--------------------|-----|-------------------|-----|
| 第一章 ● ロウソクと春 | 005 | 第九章 ● 春の料理と口 | 211 |
| 第二章 ● 傘と夏と秋 | 029 | 第十章 ● エ口本と砂時計 | 225 |
| 第三章 ● 渴望と冬 | 049 | 第十一章 ● お泊まり券と夏 | 237 |
| 第四章 ● 鐘と春 | 072 | 第十二章 ● 罨 | 267 |
| 第五章 ● 春の申し出、そして鐘と夏 | 094 | 第十三章 ● ダンジョンデート・冬 | 276 |
| 第六章 ● ダンジョンデート・春 | 121 | 第十四章 ● 秋、陥落 | 294 |
| 第七章 ● 実りの秋 | 148 | 特別編 ● 四人の想いと夜 | 312 |
| 第八章 ● 冬の『運命の人』 | 168 | | |

第一章 ロウソクと春

(どうなってんだよ……)

住み慣れた我が家。

郊外にある一戸建てで、部屋数は七つ。

特徴といえば地下室があるくらいで、他には何の変哲もない普通の家だ。

しかしその地下室の入り口で俺、斉野創平さいのそうへいは、呆然ぼうぜんと立ち尽くしていた。

眼の前に見えるのは、石造りの長い廊下。

壁には照明として松明が数メートルおきに掛けられており、まるで西洋の城塞のような雰囲気だ。

……どう見ても、我が家の地下室の光景ではなかった。

「……………」

目をこすつてから、もう一度地下室を確認する。

しかし、結果は変わらず。

やはり石造りの廊下が見えるだけだった。

(……こういう時、警察に通報すればよいのか？ それとも、消防……？ いや、病院に行つて、俺の頭を検査してもらうべき、だろうか……?)

ぼんやりと考えを巡らせてみたけれど、どうにも良い解

決策が思い浮かばない。

両親に電話するのが、たぶん一番良いのだろう。

しかし、あいにく連絡先が分からない。

うちの両親は両方とも冒険家で、確か今はどこかのジャングルにある遺跡の探索をしているはずだ。

父も母も奔放な性格だから、俺との連絡手段の確保なんではないのが常。

向こうから連絡を超越す事もほとんどないし、連絡の取りようがなかった。

(……………。……まあ、ちよつとこの調査を試みよう)

少し思案した後、そう決断する。

やはり自分は両親の血を引いているのだろう。

未知の領域が目の前にあつて、なんとなくワクワクしてしまう。

ちよつとだけ、様子を探ってみよう。

俺は靴下のまま、その廊下に足を踏み入れる。

床は石造りにもかかわらずそれなりに平坦で、足場としては悪くない。

とはいえ、次に侵入する時はちゃんと靴を履いた方が良さそうだ。

まあ、次があるかは分からないが……。

(……空気が正常か。風がちよつと、奥に向かつて吹いて

る。植物に侵食されてる感じはない。崩れる心配もなささうだ)

慎重に歩を進めながら環境を調べていく。

どうやらここは、それなりに頑丈に作られているらしい。壁を軽く叩いてみても、返ってくるのは堅い感触だけ。

崩れるような感じは全くない。

そのまま廊下を進み続けると、やがて前方に壁が見えてきた。

曲がり角だろうか。

入り口からそこまで、五十メートル以上はある。

もうお隣さんの家の下も通り越してるはずだ。

本当にこの場所は、どうなってるんだか。

「……………」

気配を殺し、曲がり角に近づく。

松明があるという事は、ここには人がいるはず。

下手な動きはしない方が良さそう。

俺は壁に身体をくつつけながら慎重に歩を進め、そしてゆつくりと角から頭だけ出した。

(……………誰もいない。それで、また廊下……………その先は、

下り階段、か?)

音を立てないように、息を大きく吐く。

とりあえずは危ない目に遭わなくて良かった。

しかし、廊下はまだ長く続いており、今度は先が階段に
なっているようだ。

ここが安全な場所なのかは、まだ分からないらしい。

(もう少し、行ってみるか……………)

ほんのちよつとの様子見のつもりだったけれど、なんとなくまだ先に行けそうだ。

俺はそれなりに足も速い方だし、もし危険なものを発見しても家まで逃げる事はできるだろう。

地下室のドアには頑丈な鍵もあるし、誰かが追ってきて
も最悪の事態は回避できるはずだ。

俺は足音を立てないように、階段へと向かう。

……………しかしその途中で、妙なものを発見した。

曲がり角から五メートルほど進んだ所。

廊下の色と似ていたためさつき見えた時は分からなかった
が、そこに薄い手帳のようなものが落ちていたのだ。

(……………なんだ、これ?)

手にとつて、開いてみる。

書かれている言語は、どうやら日本語のようだ。

内容は……………何かの覚え書き?

動物のイラストが所々に入っていて、いくつかの数字と
解説らしき文章が添えられている。

しかし記述がされているのは全体の四分の一ほどで、残

りの部分は空白。

俺は最初のページを開き、その内容を読んでみた。

そこには、手書きの文字でこう記されている。

『この手記を拾いし者よ。あなたに至上の幸福が訪れるよう、私の経験を託そう』

「??」

最初のページの記述に、思わず疑問符を浮かべる。

この文章は、明らかに俺に向けてのメッセージだ。

あらかじめここに捨てるつもりで、この本は執筆された

……という事だろうか。

俺はもう一度周囲を見渡し、異常がない事を確認してから

ページをめくった。

次のページには、いくつかの文章が箇条書きで記されている。

(ええと……『この迷宮には、Lvというものが存在する。

Lvが高いものは強く、低いものは弱い』……? まさか、

ゲームの説明書か、これ?)

一つ目の文章を読んでみて、少しだけ拍子抜けする。

この石造りの廊下についての情報が書かれているのかと思つたが、実際に記されていたのはまるでロールプレイングゲームの説明のようなもの。

そうは見えないが、本当にゲームの説明書なのかもしれ

ない。

しかし俺は、一応次の文章も読んでみる事にした。

『自分のLvは迷宮内で手のひらを見る事で確認できる。

他者やモンスターのLvは片目をつむって見る事で確認できる』

自分の手のひらを見る……?

よく分からない記述に半信半疑になりながら、俺は自分の手のひらを見てみる事にした。

すると、そこには――

「!!」

思わず目を見開く。

開かれた俺の右手。

何も無いはずのそこには、はっきりと青い文字で、数字の0が書かれていた。

(嘘だろ……?)

何かのトリックを疑ってみるも、全く分からない。

この数字は、一体いつ書かれたのか。

俺に気付かれないように誰かがイタズラした……?

いや、その可能性はかなり低いだろう。

さすがに手のひらにペンが走れば、絶対に気付く。

もしかして本当に、この本に書かれている事は正しいのだろうか。

「……………」

不気味な気分を味わいながら、本に目を戻す。

次の記述はこうだ。

『モンスターのLvはLevelであり、人間のLvはLoveを指す。いずれも強さの指標ではあるが、モンスターが戦闘経験で強くなるのに対し、人間は性交によって強くなる』

「は、はぁ……………」

書かれていた文章のアホらしさに、思わず声が漏れてしまふ。

モンスターが戦闘をして強くなるのは、まあ分かる。

しかし、人間はセックスをして強くなる……………？

もうちよつとまともな記述をしてほしい。

（まあ、この手のひらの00って数字は、合ってるけど……………）

少しばかり痛い所を突かれた気分になりつつ、右手の数字を見る。

確かに俺の性交経験は0。

童貞だ。

そういう点において、この記述は間違っていない。

俺の現在のLv……Loveは、0なのだ。

「……………」

衝動的に本を床に叩きつけたくなったのを抑えつつ、次の記述を見る。

（それで、えつと……………『迷宮には一フロアにつき三つの宝箱がある。宝箱の中身は様々な魔法の道具であり、いずれも迷宮の外でも使用できる。宝箱の中身は一年経過する事で復活する。Lvを上げるには、これらの魔法の道具を用いるのが有効である』……………魔法の道具、か……………）

この本によれば、この迷宮にはそれなりの財宝が眠っているらしい。

『魔法の道具』という呼び方はいかにも怪しいが、とりあえずは信じてみる事にしよう。

冒険家の血を濃く引いている俺には、そういう設定があった方が胸が躍る。

実際にどんなものが出てくるかは分からないが、俄然この謎の通路の先に行つてみたくなった。

俺は心臓が期待に高鳴ってきたのを感じながら、次の文章に目をやる。

この一文が最後のようだ。

『迷宮内で一定以上のダメージを受けると、強制的に迷宮の入り口に転移させられる。その際、その探索を開始してから得た全ての魔法の道具が失われ、元の宝箱に戻つてしまふ。なるべくダメージを受けないようにして生還する事、

それが肝要である』

(ダメージ量で入り口に転移……。探索の成果はなくなるけど、死ぬ事はない、つて事か……)

なるほど、これもゲームっぽい。

要は、入り口がセーブポイントで、死んだらそこからやり直し、という事らしい。

父や母がやっているような現実の冒険と違って、ずいぶんリスクが少ないようだ。

まあ、本当に死にそうになったら『転移』とやら発動してくれるのか、疑わしい所はあるが……。

(……よし)

本をバタリと閉じる。

心は決まった。

俺の身体に流れる、冒険家の血。

それは必然的に、俺を冒険へと駆り立ててしまおうらしい。血は争えないつてのは、こういう事を言うんだろうか。

まあ、ともかく――

(いっちょダンジョン攻略、してみるか……！)

我が家の地下室に突如現れた迷宮。

俺はそれを探索する事を決め、ひとまず家に戻った。

冒険には準備が大事だと、両親からも常々言われている。

何の支度もなしに未知の領域に踏み込むなど、愚の骨頂だ。

「……よし」

準備を終え、迷宮の入り口に立つ。

手には革のグローブ、足は底に鉄板の入った丈夫なブーツ、服は親のお下がりのサファリジャケット。

そして腰にサバイバルナイフ、背には様々な道具を入れた小さめのリュックサックだ。

家に冒険のための備えが山ほどあるせいで、ずいぶんと本格的な装備になってしまった。

(本によれば、第一層にはLvの低いモンスターしかいないはず……。様子を見ながら第一層のアイテムを可能な限り回収して、生還するのが今回の目標だ)

頭の中で目標を再確認し、足を踏み出す。

俺の現在のLvが0なのに対し、第一層のモンスターのLvは1〜5。

どこまでやれるか一度試し、Lvの差がどのくらい戦闘に影響してくるのか、確認してみた。

そして本にも記されていた『魔法の道具』も、最低でも一つは手に入れておきたい。

もちろん欲をかきすぎるのは良くないが、冒険の報酬がどのようなものかは知っておくべきだろう。

「……………」

心臓がドキドキと高鳴るのを感じつつ、廊下を進む。

やがて先ほど来た所も通過し、俺はその先、下り階段の前へと到着した。

ここから先は、モンスターも出現するエリアだ。

（第一層の敵は、^ク嘆きタヌキ、^クマルネズミ、^ク青い薔薇、^ク虚ろヒノキの四種……。変な戦い方をする奴はいない、はず）

階段を下る前に、手記の内容を思い出す。

あの本はすでに全て読み終え、第一層から第五層までの情報は頭に叩き込んでおいた。

知識としては十分だろう。

「ふうー……。……よし」

息を吐いて心を落ち着け、階段を下っていく。

不安よりは、ワクワクの方が大きい。

やはり俺は冒険家の子のようだ。

……。そのまま五十段ほど下りたのだろうか。

やがて階段は終わり、俺は第一層へと足を踏み入れた。

（見た目は変わってない……。石造りだ。風は奥に向かって吹いている。こっちの匂いは、たぶんバレバレかな……）

風上に立ってしまっている事を少し気にしながら、通路を慎重に進んでいく。

やはり迷宮というだけあって、道が複雑に分かれている。本にも迷宮の構造は載っていないかつたし、ここからは自分の力で探索をしていくしかない。

（とりあえず、右の壁に沿って進む事にしよう……）

心の中で一人頷き、ゆつくりと歩を進める。

迷路というのは右側の壁に手をつけてひたすら壁沿いに進む事で、あっさりとは攻略できたりする。

これは右手法という、迷路の代表的な解法の一つだ。

もちろんそれで解決できない場合も多々あるけれど、少なくとも帰り道が分からなくなる心配はない。

帰ろうと思ったら、くるりと反対を向いてまた壁に沿って歩けば良いだけなのだ。

（………………。……よし）

曲がり角が来るたび、注意して様子^{うかが}を窺いながら進む。

進む、警戒、曲がる、進む、警戒、曲がる……。

迷宮の造りは複雑で、闇雲に探索すれば確実に迷いそう^だ。

次に来る時はマッピングをしながら進むべきかもしれない。

まあ迷ったとしてもダメージを一定以上受ければ入り口に転移するらしいから、おそろく自傷によっても緊急脱出できるだろうけど。



「……………」

探索は割と順調で、そのまま何事もなく十分ほどが過ぎた。

第一層はそれなりの広さがあるようで、感覚が正しければ、今はもう階段から直線距離で三百メートルほどは離れている。

これでまだモンスターに出くわさないのだから、フロア面積は想像以上に広いのかもしれない。

(しかし、この松明……一体どういう原理で燃えてるんだ……?)

壁に等間隔でかかっている松明を見て、自然とそんな疑問が浮かぶ。

空気があるから、燃焼反応が起きるのは分かる。

問題は、燃え続けている事だ。

俺がこの迷宮を発見してからだいぶ時間が経っているし、未だに炎が上がり続けているのは明らかにおかしい。

確か松明の持続時間は、長くても二時間ほどのはずなのだが……。

(まあ、気にしちゃ負けだろうな……)

あっさり疑問を投げ捨て、探索に集中する。

ここはLvとかいう概念のある、わけの分からない世界なのだ。

それなりに常識は捨てるべきだろう。

やがて俺は、小部屋のような少し開けたスペースにたどり着いた。

息を殺し、入り口から中の様子を覗き込む。

(中央に宝箱……。だけど、壁際で動かないアレは、虚ろヒノキか……)

部屋の大きさは十畳ほど。

真ん中には、いかにも財宝の入っていそうな木と鉄でできた宝箱。

そして部屋の隅には、高さが二メートルほどある樹木が生えていた。

葉っぱは一つもなく、木の幹には人の顔のように見える

三つの空洞がある。

その表情はまさしく、虚ろ。

手記に載っていたイラストとそっくりだし、間違いなくあれは虚ろヒノキだ。

(こつちに顔が向いてるけど……俺に気付いているのか……?)

不気味な虚ろヒノキの様子に、内心で考えを巡らせる。

こちらに気付いているのなら、こつそり宝箱を開けて中身を持ち去るのは難しいかもしれない。

まあもちろんそんな度胸はないし、戦闘も一回は経験し

ておきたいと思っていたから、無視などしない。
ちゃんと戦って、堂々と宝箱を漁るつもりだ。

俺は念のため片目をつむり、虚ろヒノキのLvを確認する。

視界に浮かぶのは、1という数字。

Lv1……こちらのLvが0である事を考えると、程よい相手と言えるかもしれない。

俺は覚悟を決め、ナイフを抜き放って部屋の中に飛び込んだ。

「U A A A A A ……」

「っ！」

虚ろヒノキの口から、嘆きのような小さな呻き声が上が
る。

こちらへの威嚇だろうか。

虚ろヒノキはそのままソノソとこちらに向かってくる。
根っこを引きずっているためか、素早くはない。

俺の半分も速く動けないようだ。

「このっ！」

ヒットアンドアウェイを意識し、胴体にナイフで一撃を
入れてすぐに距離を離す。

朽ち果てた樹木を叩いたような感触。

切ったというよりは、砕いたという表現の方が正しい感

じだ。

(攻撃は通ってる……!)

手応えを感じながら、もう一度斬りつける。

今度は腕のようになっていた枝の部分だ。

狙い通り切断に成功し、俺はすかさずまた距離を取った。

「U A A ……」

こちらの攻撃にひるんだのか、虚ろヒノキの動きがにぶ
る。

俺は腕がなくなつて安全になつた方向から、もう一度胴
体に切り込んだ。

今度は渾身の力を込めて、深く。

虚ろヒノキは俺の攻撃に、大きく木片を散らした。

「U A、A ……」

虚ろヒノキの身体が、力を失つて倒れる。

今の一撃はかなり効いたようだ。

もうこちらに襲いかかつてきそうな様子もない。

そして――

「……!」

倒れた虚ろヒノキの身体が一瞬にして光の粒子に変わり、
弾けるように拡散していく。

そのまま光の粒子は迷宮の地面や壁に吸い込まれ、数秒
後には全てが消え去った。

部屋には俺と宝箱だけ。

戦闘に勝利できたようだ。

「はあ、ふう……」

肩から力を抜き、大きく呼吸する。

初めての戦闘だしかなり緊張したが、どうやら上手くやれたらしい。

攻撃回数は、たったの三回。

Lv1のモンスターならば、今の俺でも割と楽に勝つ事ができるのかもしれない。

(けど、さすがに疲れた……)

身体に感じる大きな疲労感。

俺は普通の学生で、戦うのなんて今日が初めてだ。

生まれてこのかた喧嘩もした事がないから、他者を傷つ

けるのも初体験。

戦闘時間が僅かだったとはいえ、ずいぶんと気が張って

疲れてしまった。

(この宝箱の中身だけ頂いて、今日は帰ろう……)

ナイフを鞘に収め、宝箱に近寄る。

なるべく探索したいと思っていたけれど、この調子では帰還した方が良いだろう。

この宝箱だけ漁って、素直に探索を終了するべきだ。

俺はこれからのダンジョン探索も苦労しそうだと考えつ

つ、宝箱をゆつくりと開けた。

中に入っていたのは――

(ロウソクと、紙……?)

宝箱の中にもぼつんと置かれているのは、何の変哲もない白いロウソクと、何かが書かれている一枚の洋紙。

俺は紙の方を手に取り、その内容を読んだ。

書かれている文字は、やはり日本語。

そしてその内容は、このロウソクの説明のようだった。

「夜を呼ぶロウソク。このロウソクを使用すると、その部屋にいる男女は互いを強く求め交わる事になる。屋外使用不可。使用可能回数…一回」

「斉野、お前一体どうしたんだ……?」

「えっ? いや、別に普通だぞ? 何かおかしい所あるか? ないだろ? あるわけないよな。あははは……」

「その反応が十分おかしいわ……」

初めてのダンジョン探索の翌日、月曜日。

学園に登校した俺は、朝からさっそく友人に怪訝な反応をされてしまった。

今日の俺は、やはりどこか態度がおかしいのだろうか。

いつも一緒にいるこいつには、簡単に異常が分かっちゃったみたいだ。

……昨日、俺はあの迷宮で初めての『魔法の道具』を入手した。

名前は、夜を呼ぶロウソク。

一緒に宝箱に入っていた説明書によると、どうも発情効果があるものらしい。

そんな代物を入手して平静を装うのは、なかなか難しくかった。

「と、とにかく何でもないから。ほら、もう先生来るし席に戻れよ」

「?? まあ、なんかあつたら言えよ」

なんとか友人をはぐらかす。

友人はこちらを氣遣うような様子を見せつつも、素直に自分の席に戻ってくれた。

「ふう……」

ため息を一つ吐く。

俺は演技が下手みたいだし、隠し事には向いてないのかもしれない。

今後もし隠し事はいっぱい増えるだろうし、それなりに演技の訓練もしなければならぬみたいだ。

そんな訓練、あまりしたくないけれど……。

（まあ、今後は女の子を騙したりする事も、いっぱいあるかもしれないし……）

胸にチクリと罪悪感を覚える。

あの本によれば、迷宮内で得られた魔法の道具は、Lv を上げるのに適しているらしい。

そして人間のLvとは、セックスの回数。

つまり魔法の道具は、女の子をその気にさせるものばかり、というわけだ。

（男としては嬉しい限りだけど……それは果たして道徳的に許される事なのか……? まあ、手に入れちゃった以上は使うけど……）

頭の中で、我が家の自室を思い浮かべる。

昨日ダンジョンで入手した、夜を呼ぶロウソクは、すでにセッティング済みだ。

後は誰か女の子を連れ込んで、ロウソクに火を点けるだけ。

俺のLvは今日にでも、0を脱却できるのだ。

「はあ……」

もう一度ため息を吐く。

Lvが上がれば、確かに俺は嬉しい。

女の子を抱けるし、ついでに戦闘も楽になるだろう。けれど、本当にそれで良いのか、と良心が訴えてもいる。

こんな悩みを持つてしまうのは、俺が童貞だからだろうか。

一回ヤつてしまえば、その後は罪悪感なんて覚ええないだろうか。

「おらおら、朝礼始めるぞー」

そのまま悩んでいると、担任の春町先生が、いつも通り乱暴な口調で声を出しながら教室に入ってくる。

全く、いつも思うが、なんでこの先生は見た目が良いのに、こんなヤンキーっぽく振る舞うんだろう。

服装だつて常にジャージで、長い髪もボサボサ。

色気も薰もあつたもんじゃない。

顔は正統派の美人で目もパッチリしているというのに、その美貌が台無しだ。

もう少しちゃんとすればファンクラブだつてできただろうに。

もつたいたいというのは、この事を言うのだろう。

「きりーつー！」

春町先生が教室に入ったのを見て、今度は凛とした号令が教室に響く。

声の主は、委員長の夏野さん。

いかにも気の強そうな吊り目とポニーテール、そしてとても低い身長が特徴な可愛い女の子だ。

しかし本人は可愛いと言われるのが嫌いらしく、その言葉を口にした人とは一週間は会話をしない事で有名。

小さいながらも恐ろしくツンツンした、このクラスの番長的存在だ。

俺も夏野さんに逆らうのは、恐ろしくて未だにした事がない。

「へっくしゅん！」

礼の途中で教室に響く、空気を読まない大きなくしゃみ目をやると、その主はやはり秋津さんだ。

ほんわかとした感じで、えへへ、ごめん、と周囲に愛想笑いを振りまいている。

秋津さんは、いつもこんな感じ。

垂れ目で優しそうな顔立ちをしていて、性格もおっとり。しかし体型は凶悪なほどグラマラスで、くびれと胸の差が物凄い。

ときどき男子に言い寄られる事もあるらしいけれど、いつも委員長の夏野さんが守ってあげている。

ぜんぜん違う二人だけれど、きっと良いコンビなのだろう。

「……………」

そして俺の横の席で姿勢正しく気をつけてしているのが、冬島さん。

秋津さんのくしゃみを気にせず、じっと前を見据えている。

一切の雑音が耳に入ってきていないようなその様子は、今日も痺れるほどクールだ。

冬島さんが必要以上の言葉を話した姿は一度も見た事がないし、物静かすぎて、なんだか浮世離れしている。

容姿も、雪女^{ユキメ}という例えがぴったりとハマるような感じで、整った顔立ちと冷やかな眼差しは、一部の男子を常に熱狂させているとかなんとか。

身長が高めなのに夏野さんくらい胸がないのが、唯一残念なポイントだ。

まあ、俺は小さいのも可愛くて良いと思うけれど。

(こうして見ると、うちのクラスって粒ぞろいだな……) 礼をしつつ、ぼんやりと考える。

春町先生、夏野さん、秋津さん、冬島さん。

アイドルとか女優も十分やれそうな美しい女性が、このクラスには四人もいる。

他のクラスの男子からすれば、羨ましい環境なのかもしれない。

そしてその四人の事を考えると、自然とこう思ってしまった。

もし、夜を呼ぶロウソク^{ロウソク}を使うのなら。

その相手は――

(この四人のうち、誰かにしたい……)

一度そう思ってしまったのなら、後はもうその考えを抑えられないもので。

俺はその後の授業中ずっと、四人のうちの誰かを犯す算段を、考え続けてしまったのだった。

「……………」

授業は無事終わり、放課後。

俺は一人、職員室の前に立っていた。

緊張で少し手が震える。

ちゃんと演技できるかどうかとも、少し怪しい。

――授業中ずっと考えていた邪な企みは、熟考を経て一つの結論に達する事ができた。

最初の標的は、四人のうち誰にすべきか。

そして、その手段はどうするか。

相当悩んだし、何度も実現の可能性を検討した。

そしてその結果、俺は今ここにいる。

先生たちが仕事をしているであろう職員室。

彼女もきつと、この中で雑務をこなしているだろう。

そう、俺が童貞を捨てる相手に決めたのは――

「し、失礼します……あの、春町先生、いらっしゃいますか？」

「ん？ おお、どうした斉野。珍しいな」

俺の声に対し、すぐに返事をしてくれる春町先生。

少し意外そうな顔だ。

俺が職員室に来るなんて、そう滅多にある事ではないからだろうか。

まあ俺は成績だつて悪くないし、今までなるべく自分の事は自分で解決して生きてきた。

親が奔放すぎて他の人に迷惑をかけまくつてたから、それを反面教師にしてしまったのかもしれない。

自分の用で職員室に来たのも、これがようやく二回目だ。

俺は春町先生の机まで行き、できるだけ申し訳なさそうな顔を作つて口を開いた。

「すみません、先生。ちよつと言いつらい事なんです……」

「……………。なんか斉野がそんな顔を見ると、凄く嫌な予感がするんだが……まあ、言つてみる」

美しい顔を少ししかめながら、春町先生が話の先を促す。

どうやら演技はそれなりに上手くいっているようだ。

日頃の行いが良い事もあつて、俺の言葉を疑う様子もない。

俺は自分をも騙す勢いで、そんな先生に深々と頭を下げた。

「先生、すみませんっ！　うちのバカ親が、ついにやつて

しまいました……！　来年の学費、払えないかもしれません……！！」

「はあっ!?　お、おいおい……斉野のご両親つて、確か冒険家だよな？　一体何したんだよ……」

「それが……貯金全部使つて、水中探査用の最新機器を……」

「マジかよ……」

俺の言葉に、呆然とした顔になる春町先生。

でまかせだと気付いた様子はやはりない。

本気で俺の言葉を信じているようだ。

俺はその様子に内心で快哉を叫びつつ、声を震わせて懇願する。

「先生、どうかうちのバカ親を説得して、止めてください！」

俺の言葉は聞いてくれないけど、先生の言う事なら耳を貸すかもしれない！　今からなら、注文をキャンセルはできるはずなので……！！」

自分でも驚くほどの、迫真の演技。
涙が自然と出て、本当に救いを求めているような気分になつてくる。

まるで一流の役者だ。

今朝は友人に異変を察知されて役者の才能がないと思つたけれど、どうやら本気でやれば良い演技はできるらしい。

……そして俺の最高の演技は、上手く春町先生を騙せたようだ。

「なるほど……よし、分かった！　すぐ支度するから待つてくれ。教頭先生、今日は早引きさせていただきます。良いですよね？」

慌ただしく支度を始めながら、教頭に伺いを立てる春町先生。

俺の演技は春町先生以外にも有効だったようで、教頭は、もちろんです、と大きく頷いた。

（よし……これで……！）

俺は内心でガッツポーズを取りながら、ただ申し訳なきような顔を保って、春町先生の支度が済むのを待ったのだ。

「先生、どうぞ」

「ん、お邪魔します」

学校から歩いて十分ほど。

我が家に到着した俺は、ドアを開けて春町先生と一緒に中に入った。

先生に疑うような様子は微塵みじんもない。

礼儀正しく靴を揃えているし、俺の企みには全く気付いていないようだ。

「えっと、ご両親はどこに？　案内してくれ」
「たぶんリビングだと思います。こちらです」

「おう」

先生に頷き、リビングへ足を進める。

夜を呼ぶロウソクは二階の自室にあるが、さすがにそこに連れ込むのは不審すぎる。

仕方がないので、行為の場所はリビングにするつもりだ。俺はリビングへ続くドアを開け、それからわざとらしく声を上げた。

「あれっ？　すみません、先生。父も母もまだ帰ってないみたいですよ。たぶんもうすぐ帰ってくるので、ちょっと待っていただけませんか？」

「む……そうか。まあ緊急事態だし、いくらでも待つよ」

「ありがとうございます。じゃあ、そこに座っててください。すぐお茶菓子とか持ってくるんで」

先生に指示を出し、リビングを出る。

向かう先はもちろん自室だ。

俺は急いで、夜を呼ぶロウソクを手にし、一回深呼吸をしてからまたリビングへ戻った。

「ん？　斉野、それはなんだ？」

「えっと、これはアロマキャンドルです。母が趣味で集めてるんですけど、なかなか使う機会もないし、せっかくだ

から使つてみようかと」

「……？　　そうか、まあ構わないけど……」

少し不思議そうな表情の春町先生。

今の言い訳は、ちよつと苦しかったかもしれない。

とはいえ断る理由もないようで、先生はロウソクの使用を許可してくれた。

俺は脳がチリチリとするような感覚を覚えながら、そんな先生の眼の前で、夜を呼ぶロウソクに火を点ける。

そして倒れないように皿の上に乗せ、テーブルの上に置いた。

「……………」

「……………」

先生と二人で、なんとなく揺らめく炎を眺める。

炎の色は、ごく普通の赤色。

しかし次の瞬間、俺の心臓がドクンと高鳴った。

（あれ……？）

とても不思議な感覚。

心臓が締め付けられるような、とても切ない感情が、胸の内から溢れ出してくる。

そしてテーブルの向かいに座る先生に目をやると、その感情が爆発するように頭の中を侵食した。

春町先生が欲しい。

こんなに綺麗な人を放つておくなんてできない。今すぐにでも、自分のものにした。

思考がそんな欲望でいっぱいになり、呼吸が酷く乱れる。そしてそれは向こうも同じなようで、春町先生は頬を染め、興奮した面持ちでこちらを見ていた。

これが、夜を呼ぶロウソクの効果……！！
恐ろしいほどの精神支配だ。

「さ、斉野……あ、あのな、その……ちよ、ちよつとだけ、そつちに行つても良いか……!!」

そう言つて俺の返事も待たず、席を立つ先生。

視線が熱を帯びていて、何を考えているかがよく分かる。雰囲気としては発情期の猫、あるいは、獲物を狙う猛獣という例えが相応しいかもしれない。

とにかく俺と交わる事だけを考えているようだ。

「春町先生……！！　くっ……！！」

俺は心の中で春町先生への愛おしさが暴走しているのを感じつつも、なんとか気力を振り絞つて椅子に座り続ける。関係を結ぶにしても、『春町先生の方から迫ってきた』という建前が欲しい。

その方が絶対に、今後の春町先生との交渉がやりやすくなるはずだ。

そのまま我慢していると、春町先生は俺の肩を強く掴ん

できた。

「な、なあ、斉野……な、何か悩んでる事はないか？ 斉野の歳だと、い、色々寂しくなったりとか、するんじゃないか!？」

「ど、どうでしょうね？、寂しかったら、どうなんです？」「そりゃあ私は、先生、だからな……！、せ、生徒が寂しかったら、そりゃあ……」

荒い呼吸で会話を続けながら、先生の顔がゆっくりと近づいてくる。

頬の赤く染まった、完全な発情顔。

いつも学校で会う担任教師がこんな顔をしてしまっている事に、俺の心臓がドキドキと早鐘を打つ。

二人の間の距離は、そのままゼロへと近づいていく。

そして――

「斉野……んちゅつ、ん、ちゅ、んはあ、んちゅ……!」

俺の唇に情熱的にむしゃぶりついてくる春町先生。

柔らかい。

先生の唇はプルプルと弾力があって、貪るように何度もこちらの唇をついばんでくる。

俺は最後の気力を振り絞り、そんな先生を引き離した。

「先生っ、や、やめてください……!! 俺は教子ですよ……!!」

「うっ……!! い、いや、斉野、お前は何も考えなくて良い! 全部私に任せるんだ……!! ちゅつ、ん、ちゅうつ、ちゅむ……!!」

俺の抵抗に対し、春町先生が理性を忘れた顔で再びキスしてくる。

その言葉も行動も、完全にセクハラ教師といった感じだ。……これで十分、『春町先生の方から迫ってきた』という建前は完成しただろう。

もう我慢は必要なさそうだ。

俺は自分もまた理性を放り投げ、先生の胸に手をやる。

そしてそのまま、やや大きめの乳房を揉みしだいた。

「んっ……!!」

キスを続けつつも、鋭い吐息を漏らす先生。

しかし俺の手を拒絶するような様子はやはりなく、気持ちよさそうな顔をしている。

「はあっ、んっ、斉野……っ!」

唇が離れ、先生がもどかしそうな手つきで着ているジャージを脱ぎ捨てていく。

どんだん露わになつていく先生の肌。

下着は色気のないベージュ色のものだが、それがまた生活感を感じさせて、一種のエロさを醸し出している。

胸はやはりポリウレームがあつて、お尻もまた大きめ。

ジャージの上からでは分からなかったが、太腿がむっちりとしていて、成熟が感じられる。

しかし腰はちゃんとくびれているから、太っているという印象は全くない。

グラビアアイドル的な、セックスアピール満点の身体だった。

「ん……！」

先生はそのまま躊躇せずに背後に手をやり、ブラジャーのホックを外す。

そして肩紐を腕から抜いて、乳房を空気に曝した。

下着の色とよく似ている、薄茶色の乳首。

俺は思わずそれを凝視し、ゴクリと唾を呑み込んだ。

先生はそんな俺の視線に気付く余裕もないのか、続けてショーツにも手をかける。

そして勢いよく、先生の鼠径部が露わになった。

（うわ……！）

眼の前の光景に、酷く心を揺さぶられる。

先生の秘所には、毛がなかった。

少しだけ青くなっているし、おそらく毎日剃っているのだろう。

がさつな先生らしい、思い切った手入れの仕方だ。

「斉野お……！」

衝撃を受けていた俺に、全裸になった先生が迫ってくる。その手は俺の下半身に向かい、迷う事なくチャックにかかった。

「っ！」

「……!! ふ、ふふっ、斉野もやっぱり男だな……！」

チャックを下ろした瞬間に、その隙間からトランク스에包まれた硬い肉棒が露わになる。

先生はそれに怖いくらい獯猛な目つきになって、呼吸をさらに荒くした。

俺はライオンに襲われるシマウマの気分を味わいつつも、それを歓迎するようにさらに肉棒を硬くする。

先生が発情しているのと同じくらい、俺も発情しているのだ。

早く先生に、性的に食べられてしまいたい。

「先生……っ！」

「ま、待ってるよ、斉野……！ 今すぐ天国に連れてってやるからな……！」

先生はそんなエロ小説みたいなセリフを口走りながら、座っている俺の太腿に跨がってくる。

どうやら対面座位でするつもりのようなのだ。

（……!!）

太腿に感じる水気。

先生の股ぐらから愛液がこぼれ落ち、俺の脚を濡らしたらしい。

少し心配だったが、前戯なんて全く必要なさそうだ。

「はぁーっ、はぁーっ……！」

俺の肉棒を掴み、思考力を投げ捨てた顔で自分の秘所にあてがう先生。

ヌルヌルとした感触が先端を襲い、先端が僅かに温かい感触に包まれる。

そして――

「んんんっ！」

「ううっ!!」

ずぶずぶずぶ……っ！

先生のお尻が、俺の太腿に密着する。

肉棒全てが温かく絡みついてくるような感触に包まれ、

その気持ちよさに思わず顔がのけ反ってしまった。

「はぁっ、はぁっ……斉野お……！」

「先生っ……！」

深く繋がったまま、先生と視線を合わせる。

そして自然と二人の顔は近づき、唇が再び触れ合った。

（あぁ……）

愛おしさで胸が熱くなるのを感じながら、夢中で先生のキスに応える。

俺と先生はそのまま何度も唇を重ね、やがてようやく顔を離して見つめ合った。

「んっ、ふうっ、はぁ……斉野……！」

「先生……っ！」

肉棒には、包み込むような温かい柔肉の感触。

そして身体全体に春町先生の肌の温もりを感じる。

ひたすらに幸福で、途轍もない充足感があった。

しかし、夜を呼ぶロウソクの効果もあって、欲望は際限なく膨らんでいく。

この気持ちいい穴の中に、情欲の全てを吐き出したい。

そんな男の本能が、俺を居ても立ってもいられない気分になさせてくる。

「先生、その……」

「あぁ、分かってる……いっばい気持ちよくしてやるから

な……んっ、はぁっ……！」

俺の催促に対し、先生が頷いて腰を揺すり始める。

膣穴が肉棒を優しくしごき、摩擦で快感を生み出す。

今まで経験した事がない快楽に、俺は堪らず歯を食いしばった。

「んんっ、あっ、んっ……斉野、出したくなったら、いつでも出して良いからな……ん、はぁっ……！」

快感に耐える俺を見つめ、魅力的な言葉を口にする先生。

その腰は上下だけでなく色々な方向にくねり、俺の肉棒を巧妙に悦ばせる。

しかし同時に先生も大きな快楽を得ているようで、その表情にあまり余裕はなかった。

「んあ、ん、はあつ……！ あつ、ん、はあつ、斉野お……！」

「くう……つ、先生……気持ちいいです……！」

「私も、私も気持ちいいぞ、斉野……つ！ 斉野の、すごく硬くて、遅い……！」

教師と生徒という関係を忘れ、互いに快楽を貪っていく。

普段は女性らしい所を見せない春町先生も、今この瞬間は一人の立派なメスではない。

「んう、あうつ、んふうつ……！」

先生が腰をグリグリと押し付け、背中をのけ反らせる。

どうやら一番奥を突かれるのが好きらしい。

俺は自分も少し腰を突き出し、先生の子宮口を攻撃してやっつた。

「んあつ、斉野、良い……つ！ ああつ……！」

こちらの髪を両手で切なげに撫で、色っぽい嬌声を上げ

る先生。
俺はそんな先生を抱き寄せ、その首筋にキスをする。

そして腰を揺すって何度も最奥を突いてやりながら、思

い切り肌を吸った。

「んんっ……！」

先生が短く吐息を漏らし、膣をキュッと収縮させる。唇を離して吸った所を確認すると、そこにはしつかりと赤い内出血ができていた。

「先生は、俺の女だ……！」

「ああつ、んっ、はあつ、バカあ……つ！」

マーキングされたという事実にも、先生が喘ぎながら俺を詰ってくる。

しかしその声に拒絶の色は一切ない。

むしろ表情を見ると、嬉しそうに尻尻が下がっていた。まるで恋人にプロポーズでもされたような、幸せそうな微笑みだ。

「先生……つ！」

「んあつ、あう、ん……斉野お……！」

愛おしさのままに下から突き上げると、それに呼応して先生も腰を動かす。

愛液の撥ねるクチュクチュという音と、身体のおつかる

打擲音。

先生は俺の肩を両手で掴んで、夢中になって身体を跳ねさせる。

その動きに、肉棒はどんどん高まっていった。

「せ、先生、俺、もう……！」

「んっ、ん、我慢なんて、しなくて良いっ……！ 大丈夫だから、中にいっぱい、出して、ん、ああっ……！」

初めての体験で、もう限界が近い。

しかしそれを伝えても、先生は少しも嫌な顔をせず、出しを許可してくれる。

そしてその上、俺の射精を促すように身体の動きを速く小刻みにした。

「ん、んっ、はあっ、ん、あ、あっ！」

一生懸命に上下運動をしながら声のトーンを高めていく春町先生。

眼の前で乳房がプルンプルンと跳ね、その柔らかさを声高に主張する。

先生のボサボサの長い髪も上下運動で激しく揺れていた。俺は乱れる先生の姿を目で楽しみながら、そのまま抗う事なく限界への階段を駆け上がっていく。

「ううっ、で、出ます……！」

「私も、もうっ……！ 斉野っ、一緒に、一緒にイッて……！！ んっ、んはあっ！ んっ、はあっ、あんっ！」

「くうっ……！」

最後の瞬間に向け、二人とも夢中で快楽に没頭する。春町先生も俺も、もう何も考える事ができない。

そのまま限界は急速に近づき、そしてついにその瞬間は訪れた。

「く、ああっ、出るっ！」

「んうっ、あ、ああっ、イクっ、あ、あああああーッ！！」

ドクッ！ ドクッ！ ドクッ！ ドクッ！

「ああっ、あうっ！ んっ！ あああっ……！」

頭の中が真っ白になるほどの快感。キユウキユウと締め付ける膣の中で、肉棒が先端から勢いよく精液を噴出させる。

先生は俺を抱きしめ、精液が最奥を叩くたびに身体を震わせる。

射精は驚くほど長く続き、その全ては先生の中に注ぎ込まれていく。

「はあっ、ん、あう、うう、斉野お、んん……！」

精液の放出が一段落すると、先生はゆっくりと身体を離して俺を見つめてくる。

潤んだ瞳、そして紅潮した頬。

その表情は、幸せと愛おしさに満ちていた。俺は脱力し、豊満な乳房の谷間に顔を埋める。

先生はそんな俺の頭を、優しく撫でてくれた。温もりと気持ちよさに包まれて、最高に幸せだ。



「先生、俺……先生が初めてで、良かったです」
「ふふっ……私も斉野の童貞を貰えて、幸せだよ」

二人ともうっとりとした声で感想を言い合う。

欲望を解き放った今でも、先生への愛おしさは消えない。
夜を呼ぶロウソクは一回きりのアイテムだったはずだが、どうやらその『一回』というのは行為の回数ではなく、『一回だけ火を点けられる』という事らしい。

途中で炎を消したらどうなるのか……ちよつと疑問ではある。

しかし、それを試す気には全くなれない。

先生との熱いひとときをもつと長く楽しみたいのだ。
なるほど、そういう意味では確かに、夜を呼ぶロウソクを二回使うのは不可能かもしれない。

それから一分ほど、イチャイチャとしていただろうか。

二人の愛は、すぐに互いの衝動を復活させた。

「なあ、斉野……もう一回……」

「はい……。あの、次は後ろからして良いですか……?」

「ああ。斉野のやりたいように、いっぱいしてほしい。一緒に……」

俺と先生はそう言葉を交わし、次の行為のためにようやく身体を離す。

そして今度は床で、後背位でのセックスを始めた。

「んっ、斉野っ、気持ちいい……っ！ん、はあっ、あんっ！」

俺の腰使いに、可愛らしい嬌声を上げる春町先生。

そのまま俺と先生は、飽きる事なく交わり続けたのだつた。

「んっ、あ、あっ、ああっ、イクっ……！あ、あああ
ああっつ!!」

「くうっ！」

ドクッ！ドクッ！ドクッ！ドクッ！ドクッ！

肉棒が限界を迎え、仰向けになって股を開く先生が一番奥で、再び精液を吐き出す。

これで五回目の射精。

相変わらず最高に気持ちよくて、信じられないほどの多幸感が襲ってくる。

夜を呼ぶロウソクの使用を開始してからおよそ一時間。

俺と先生は休憩も挟まずにセックスを続け、二人して快楽を貪り続けた。

説明書には『このロウソクを使用すると、その部屋にいる男女は互いを強く求め交わる事になる』とあったが、その効果はどうやら炎が灯っている間ずっと続くようだ。

俺も先生もこの一時間、ただ交わる事しか考えられな

った。

……しかし、それももうそろそろ終わらしい。

チャリとテーブルの上を見てみれば、ちょうどロウソクの芯はなくなり、火が消えかかっている。

そして数秒後、ついに炎はその輝きを失った。

すると――

「……っ！」

まるで眠りから覚めたみたいに、ハツとした表情になる先生。

その手は慌てて身体を隠し、俺を見る目が急に熱を失った。

「さ、斉野、これは……わ、私は……！」

先生が取り乱しながら、何か言おうと口を動かす。

何か言い訳をしなければと思っているのかもしれない。

俺はそんな先生の様子に複雑な感情を抱きながら、あらかじめ考えておいたセリフを言ってあげた。

「先生、今日の事は二人の秘密にしておきましょう。生徒に手を出したのが知られたら、教師なんて続けられないでしょうし」

「っ！ そ、そうだな、その……そうしてくれると助かる

……うう」

俺の言葉に先生が後悔した顔になって頷く。

自分が犯してしまった過ちの大きさに、ようやく思い至ったのだろう。

（こんな表情されるのは、正直ちょっと傷つくな……）

胸がチクリと痛む。

ロウソクの効果が切れたから、俺の先生への愛おしさもすでに消えている。

とはいえ、愛し合った相手が後悔した表情を浮かべるのは、なかなかシヨックだった。

「とにかく、今日はもう帰ってください。うちの両親の説得は、なんとか自分の力でやってみますから」

「……すまん」

先生は俺の言葉に弱々しく頷くと、立ち上がって身支度を始める。

秘所から太腿に精液が垂れたけれど、それはすぐにティッシュで拭き取られてしまった。

（俺のLvは、ちゃんと上がったのかな……）

俺は酷い脱力感を覚えながら、そんな事をぼんやりと考えるのだった。

第三章 渴望と冬

「ふう……」

ようやく我が家に到着し、ため息を一つ吐く。

身体に感じるのは、僅かな疲労。

心が緊張していたから、肉体も引きずられて疲れてしまつたようだ。

……雨の中行われた、三人での下校。

その結果は、成功とも失敗とも言い難いものだった。

一緒に入った異性を恋に落とす、運命を感じる傘、によつて、二人の少女との関係は大きく変わってしまった。

夏野さんと、秋津さん。

相合い傘をした時間はそれぞれおよそ十五分と十分で、

夏野さんの方は完全に恋愛感情を植え付ける事に成功した。

しかし秋津さんの方は上手くいかなかった……というより、明らかに疑念を持たれてしまった。

それなりに恋愛感情も芽生えたようだが、十分という感じはない。

秋津さんに関しては、むしろ警戒する需要ができてしまつたかもしれない。

(まあ、とにかく……)

学生服を脱ぎ、探検の準備を始める。

なにせよ、ダンジョン探索は続けた方が良い。

新しいアイテムが手に入れば、それによつて秋津さんの問題が解決する可能性もあるのだ。

「……よし」

装備が整った事を確認してから地下室へ向かう。

昨日のダメージは残っていないし、体調も万全だ。

今日も有意義な探索ができるかもしれない。

俺はそのままダンジョンに足を踏み入れ、第一層に侵入した。

(様子に変化はなし、か)

相変わらず風は奥に向かって吹いていて、通路の感じも今まで通り。

壁にはやはり松明が燃えていて、石造りの廊下を照らしていた。

(今日の目標は、第一層の最後のアイテムの入手。それから余裕があれば、第二層にも侵入してみたい)

おとといから攻略を始めた第一層。

アイテムの収集状況や自分のLvを考えても、そろそろ次の階層に進んでも良い時期だ。

第二層の敵のLvは、手記によれば5〜10のはず。

これまでの経験からすると、決して勝負できないレベル

ではないだろう。

俺は頭の中で考えをまとめると、ゆっくりと通路を進み始めた。

昨日と同じく、左の通路に入ってすぐに右に曲がる。

そのまま前回の虚ろヒノキから不意打ちを食らった場所を過ぎ、慎重にマップを埋めていった。

（おっ……あれは、嘆きタヌキか。初めて遭遇したな）

探索を始めてから五分ほど。

前方の通路に、クマくらいのサイズの獣を発見する。

体躯は立派だが、毛の色が灰色でみすばらしい。

壁をしきりに撫で続けているが……あれはもしかして何かを嗅いているのだろうか。

片目をつむって見てみると、4という数字が浮かんだ。

「……………」

息を殺し、ナイフを鞘から抜く。

そして足音を立てないよう、慎重に背後から近づいていく。

「ふっ！」

射程距離に入ると同時に、嘆きタヌキのうなじに一閃。

肉を切る生々しい手応えがあった。

「GYUUUU……」

嘆きタヌキの身体がゆっくりと倒れる。

血は出ていない。

しかし、今の攻撃は致命的なダメージを与えたようだ。

「……………」

嘆きタヌキが光の粒子に変わったのを確認し、身体の力を抜く。

とりあえずLv4の嘆きタヌキには楽に勝利できた。

これでこのフロアの敵は全種類を倒せた事になる。

（あとは残り一つのアイテムを回収すれば、心置きなく第一層を卒業できるな……）

ナイフを腰元に戻しつつ、迷宮の探索を再開する。

あと発見すべきは、宝箱と第二層への入り口だけ。

攻略が順調に進んでいて、ちよつと気分が良い。

まあ、決して油断はしないけれど。

俺はそのまま、迷宮内を闊歩していく。

そして探索開始から二十分ほどで、目標のうちのひとつにたどり着いた。

（階段……）

何度も通路を曲がったその先。

俺の目の前に、どこまでも続くような長い下り階段が出現した。

スマートフォンでマップを見ると、ここはどうやら第一層のちょうど真ん中。

入り口から直線距離でびったり二百メートル離れた所だ
った。

(これは間違いなく、第二層への階段だろう。フロアのち
ょうど真ん中つてのは、偶然……ではないかもしれない)
階段に下を眺めながら、ぼんやりとそんな事を考える。
ここまでマップのど真ん中にあるのは、さすがに作為的
なものしか感じられない。
もしかして第二層以降も、次のフロアへの入り口が中央
にあるのだろうか。

(……とりあえず、まだ下には潜らないでおこう)
階段に背を向け、引き返す。

第二層に行く前に、残り一つのアイテムを回収しておき
たい。

それが迷宮の入り口に近い場所なら、一旦脱出してアイ
テムを確保、その後に第二層へ侵入する、という選択肢も
ある。

俺はアイテムを求め、未踏の通路を進んでいく。
もう第一層のマップはだいぶ完成してきた。
行っていないのは中央のやや左上の所だけ。
宝箱はそこにあるだろう。

「……………」

黙々と足を動かし、警戒しながら探索を続ける。

そしてその僅か数分後——
(!! 小部屋……………!)

迷宮の壁にぼつかりと開いた、そこその大きさの入り
口。

今まで二つ小部屋を見てきたが、それと全く同じ感じだ。
自然と期待に胸が高鳴る。
今までの経験からすれば、この中には宝箱があるはずな
のだ。

(……………!! やつぱりある……………! そんな、その近
くには嘆きタヌキか……………)

中央には予想通り宝箱。

そしてこれも半ば予想していたが、モンスターも一緒だ
った。

どうやら小部屋には、宝箱一つとモンスター一匹が必ず
いるものらしい。

欲しければ奪え、という事だろうか。

俺はナイフを抜いて片目をつむる。

小部屋の嘆きタヌキのLvは……………3か。

先ほどLv4の個体を一撃で倒したし、苦戦はしないだ
ろう。

そのまま小部屋に侵入し、嘆きタヌキの前に躍り出る。

どのみち後ろを向いていなかったから、不意打ちは不可

能だ。

「GYU!! GYUGYUGYUU!!」

俺に気付き、威嚇の鳴き声を上げる嘆きタヌキ。

警戒しているのか、向こうから近づいてくる様子はない。

（素早く近づいて、頭に一撃。ひるんだら追撃、ダメージがなさそうなら後退、つて感じでいくか……）

頭の中で攻撃のイメージを固める。

それなりに戦闘経験を積んできたから、思考はかなり冷静だ。

軽く動きのシミュレーションをする事もできる。

「……っ！」

タイミングを見計らって足を踏み出す。

嘆きタヌキは迎え撃とうとしたのか、片方の腕を振り上げようとした。

しかし、遅い。

迎撃の準備が整うより早く、俺のナイフが下段から嘆き

タヌキの頭部に走る。

「はっ！」

「GYUA……GYUU……！」

手応えあり。

ナイフは嘆きタヌキの頭を、顎あごの下から鼻にかけて切り裂いた。

感触からすると、骨も断つたらしい。

嘆きタヌキはもんどり打ち、両手で傷口を押さえる。

俺はもがく敵の首筋めがけ、ナイフを振り下ろした。

「GGGYU……」

嘆きタヌキは絶命し、小さな呻きとともに光の粒子に変わる。

俺はそれを確認し、ナイフを鞘へと戻した。

完全勝利だ。

（やっぱりこの階層は、先制攻撃が強すぎるな……）

身体から力を抜きつつ、ぼんやりとそんな事を考える。

第二層以降は分らないが、少なくともこのフロアの敵相手には突進からの素早い一撃がかなり有効だ。

攻撃すればほぼモンスターはひるんでくれるし、そこからの追撃もたやすい。

唯一、青い薔薇だけはひるみ方が少ないくらいだ。

（果たして第二層はどうなるか……。そんなにタフな敵がないと良いんだけど……）

少し不安を抱きつつも、宝箱に近寄る。

とりあえず今は戦利品の確認だ。

俺は期待で一気に心拍数が上がってきたのを感じながら、ゆっくりと宝箱の蓋を開ける。

中には――

(何かの液体と……説明書か)

宝箱の中に置かれているのは、透明な瓶と、一枚の紙。

瓶は栄養ドリンクを一回り小さくしたくらいの大きさで、中には無色の液体が入っている。

何かの薬品だろうか。

俺は紙の方を取り上げ、その内容を読んだ。

『渴望のエキス、これを飲んだ女性は精液を飲み干した
いという激しい衝動に駆られる。衝動が収まるには、エキ
ス十ミリリットルにつき射精一回分の精液を要する。内容
量…三十ミリリットル』

第一層最後の宝箱。

その中に入っていたのは、精飲衝動をブーストする、渴
望のエキス、という代物だった。

俺はそれをリュックサックに仕舞い、戦闘で瓶が割れて
しまわないよう、すぐさま家へと帰還。

第二層に行くのを中止し、その日の探索を終えた。

第二層に行く余裕は確かにあった。

けれど手に入れた、渴望のエキス、について使い道を考
える時間が欲しかったし、探索ならいつでも行える。

使いやすそうなアイテムだったという事もあって、Lv
を上げてから第二層に行く方が攻略も楽で利口だと思っ

た。

……そして結局、俺はその晩を、ひたすら、渴望のエキ
スの使い道を考える事に費やした。

もし女の子に飲ませるとしたら、どういう手段が適切か。

それに、誰に飲ませるべきなのか。

考えなければならぬ事は多く、なかなか計画の立案
は難航した。

ようやく明日の行動が決まったのは日が変わりそうなく
らいの時刻で、俺は急いで支度を済ませ、ベッドの中に潜
ったのだった。

次の日、水曜日。

俺はある準備を終えてから、家を出た。

いつもと同じ登校風景。

しかしやはり、少しだけ歩くのが速くなってしまふ。

ダンジョンを発見してからは、ずっとこうだ。

今日は女の子たちとどんな事になってしまふのか……そ

んな期待で胸が高鳴り、自然と身体に力が満ちてしまふ。

年頃の男子には、抗いような現象だった。

(そういえば、ぜんぜん罪悪感を感じなくなつたな……)

ふと自分の内面の変化を自覚する。

確か最初のアイテム……夜を呼ぶロウソク、を春町先

生に使おうとしていた時は、胸が少し痛んだ。

けれど今は、アイテムを使う事に何の迷いもない。

童貞を捨てたおかげで、色々な事が割り切れるようになったのだろうか？

あるいは、戦闘を何度も経験したために精神が強くなっ
てしまったのか。

たった数日しか経っていないのに、ずいぶん心が冴太く
なった気がする。

果たしてそれが良い事なのか、それとも悪い事なのかは、
分からないけれど……。

しかし自身の変化について考えていたその時、背後から
僅かな衝撃が身体を襲った。

背中を軽く叩かれたらしい。

驚いて振り向くと、そこには――

「う、うっす、斉野……」

「……夏野さん？」

目を背けながら小さい声で挨拶をしてくるのは……なん
とあのツンツン委員長、夏野さんだった。

今日もちっちゃくて可愛らしい。

しかし顔がとても赤くなっていて、ひと目見ただけで恥
じらっている事が分かった。

……どうやら昨日の相合い傘の効果は、しっかり今日も

持続しているらしい。

いつもの気の強さは身を潜め、俺と話す事への照れがよ
く伝わってくる。

なんとなくいつもよりポニーテールがちゃんとまとまっ
ているのも、もしかして俺の目を気にしての事だろうか？

「おはよう。秋津さんは一緒じゃないんだね」

「っ！……ま、摩耶がいないと……ざ、残念……？」

何気なく言った言葉に、潤んだ上目遣いで恐る恐る質問
を返してくる夏野さん。

身長も低いし、小動物みたいで可愛い。

俺はそんな夏野さんに、安心させるように微笑んだ。

「そんな事はないよ。ちょうど夏野さんと登校したい気分
だったし」

「っっ!!」

夏野さんがバツと背を向け、顔を手で覆う。

面白いくらいのチョロさだ。

軽いいたずら心で言ってみただけなのに、ここまで照れ
てくれるなんて。

俺はまるで夏野さんの全てをたやすくコントロールでき
てしまうような万能感に浸りつつ、チラリと時計を見た。

始業まで大して時間の余裕はない。

こんなに可愛い姿を見てしまうと、思わず予定を変更し

て、渴望のエキス^スを使ってみたくなってしまうが、どうやらそれはダメそうだ。

「そ、その……斉野は……」

「ん？」

「斉野は誰にでも、そういう事言ってるの……？」

「そういう事？」

「一緒に登校したい気分、とか……」

こちらの顔色を窺いながら、小さい声で聞いてくる夏野さん。

俺はそれに対し、微笑みを向けて答えた。

「どうだろうね？ でもそんなに誰にでもは言わないと思うよ」

「っ！ そ、そう……！」

夏野さんは俺の返答に、顔を真っ赤にして歩くペースを速める。

とても嬉しそうだ。

自覚しているか分からないが、口もニヤけてしまっている。

俺は自分も足の運びを速くし、隣の位置をキープする。

そしてそのまま夏野さんと、一緒に学校へ向かうのだった。

教室に着いた俺たちは、ようやく別れてそれぞれの席に向かった。

そしてそれから十分くらいして、教室のドアがガラガラと開く。

春町先生だ。

「お、おはよう。みんな、席に戻れ」

春町先生はこちらをチラリと見つつ、少しだけ小さく教室に声を響かせる。

昨日よりは多少マシだが、やはり俺と肉体関係を持つてしまった事を引きずっているようだ。

まあ、真つ当な教師ならそれが普通なのかもしれない。生徒とセックスしてしまうなんて、先生としては一番シ

ョックな事だろうし。

「ぎりーっ！」

頃合いを見計らって夏野さんが号令をかける。

生徒たちは立ち上がり、タイミングを揃えて礼をした。

そしてそのまま、一斉に席につく。

(……秋津さんの様子は、やつぱり普通だな)

それとなく教室の後ろの方に目をやり、秋津さんの様子を確認する。

しかし秋津さんはいつも通りのおっとりとした態度を崩さず、こちらに目を向けるような事もない。

昨日見せたような知的な好奇心に満ちた表情は、どこにもなかった。

（まあ、とりあえず警戒だけはしておこう……。アイテムを使うにしても、バレにくいのにしれないといけないな）

秋津さんへの対策を頭の中でまとめつつ、顔を前に戻す。ダンジョンの事を知られないよう、注意が必要だ。

しかし秋津さんのあの肉感的な身体はかなり魅力的だし、エロい事を諦めるつもりはない。

いつか最適なアイテムが見つかったら、思う存分えつつな事をさせてもらおう。

俺は心の中でそんな事を決意してから、チラリと隣の席を窺った。

春町先生は俺と接近するのを恐れている。

夏野さんと秋津さんは一緒にいる事が多いから、狙いつらい。

ならば今日の標的は、一人しかない。

「……………」

少しも身じろぎせず、じつと前を見据える隣の席の美少女。

クールで、謎めいていて、そして美しい。

スラッとした体軀はモデル並みで、長いストレートの黒髪はツヤがある。

胸はべつたんこだが、それすらも雰囲気合っていて魅力的。

完成された『美』が、そこにはあった。

……そう、俺が今日、渴望のエキスを、使おうとしている相手は、この芸術品のような少女。

冬島縁糸^{えにし}だった。

時間はそのまま順調に過ぎていき、授業は全て終了。

待ちに待った放課後が訪れた。

「……あの、冬島さん」

俺は授業が終わると同時に、すかさず隣の席に向かつて声をかける。

冬島さんは部活にも所属していないし、いつもすぐに帰宅してしまう。

すぐに声をかけなければ、タイミングを逸してしまうのだ。

「……何？」

何の感情も持たない目でこちらを見る冬島さん。

うーん、やっぱりクールだ。

俺に声をかけられても、全く心が動いていないように見える。

俺はそんな冬島さんに対し、できるだけ爽やかな笑顔を

作った。

「ちよつとさっきの授業で分からない所があつて……冬島さん、数学得意だったよね？ 良ければ教えてほしいんだけど……」

「……別に良いけど」

やはり感情の動きを見せず、冬島さんが頷く。

すんなり承諾してくれたのは、ちよつと意外だ。

多少は洪られると予想していたのだが……。

しかしまあ簡単に頷いてくれたのは、俺としては非常にありがたい。

俺は、ありがとう、と言つてから冬島さんの席と机をくつつけた。

「どこ？」

「えつと、ここの三角比の部分なんだけど……」

どの部分が分からないのか短く聞いてきた冬島さんに、教科書を開いて適当に指差す。

さっきの授業で先生が解いていたそこそこの難易度の問題だ。

数学が得意な冬島さんにとつては比較的簡単だろうし、実は俺も先生の解説だけで理解できている。

しかし問題の難易度なんて、今は関係ない。

たとえ解き方が分かつていたとしても、理解できないふ

りを続けなければいくらでも冬島さんを引き止められるのだ。

もちろん門限などがあるだろうから、無限に居残りをさせる事はできないけれど。

(……ん？)

なんとなく視線を感じて顔を上げる。

そしてすぐに視線の正体に気がついた。

教室の出口。

そこには何か言いたげな、しかし、どうしても声をかけられないといった感じの小柄な少女がいた。

夏野さんだ。

俺が冬島さんと接近するのを見て、複雑な感情を抱いてしまつているのだろうか。

しかしそんな夏野さんの背を、傍らにいる秋津さんが押す。

「姫依、ほら、帰ろ帰ろ」

「う、うん……」

秋津さんに急かされ、夏野さんは教室から出ていく。助かった。

今ここで夏野さんに余計な茶々を入れたら、色々不都合があつたかもしれない。

昨日は鋭く追及してきた秋津さんだけれど、今回は俺に利のある行動をとつてくれたようだ。

だが――

「……………」

教室から出る間際、秋津さんの目がこちらを向いてすつと細められる。

昨日も見た、冷静でありながら知的好奇心に溢れた目。

……どうやら秋津さんは、ただ単に俺の手助けをしてくれたわけではないらしい。

(やれやれ……)

秋津さんの意図を察し、心の中でため息を吐く。

おそらく秋津さんは、俺が冬島さんを狙っている事に気付いている。

そしてその上で、冬島さんをモルモットにする事を決めたのだろう。

冬島さんが今日と明日でどう変化したのか……それを観察し、俺の秘密を探るつもりなのかもしれない。

あるいは「協力してやるから秘密を教えろ」という事なのか。

どちらにせよ秋津さんにとって、冬島さんは良い生け贄というわけだ。

「まず、余弦定理を使う。それから……」

秋津さんや俺の思惑も知らず、冬島さんが解説を始める。俺は教科書に目を戻し、冬島さんに意識を集中する事に

した。

なんにせよ、邪魔が入らないのは良い事だ。

そのまま教室からは生徒がいなくなっていく、やがて俺と冬島さんの、二人だけが残った。

「……ありがとう。凄くよく分かったよ」

放課後の教室。

時刻は十七時頃。

俺はようやく、冬島さんにニッコリと笑って礼を言った。もう十分に引き止める事ができたし、他に生徒も残っていない。

グラウンドからは運動部の上げる掛け声が聞こえてきているが、校舎には誰の気配も感じられなかった。

「そう……どういたしまして」

興味なさそうに返事をする冬島さん。

一時間以上も引き止められたというのに、特に何の感情も抱いていないみたいだ。

俺としては、文句を言われる覚悟はしていたのだが……。冬島さんはそのまま荷物をまとめ始める。

用も済んだし、すぐに帰るつもりなのだろう。

しかし俺はそんな冬島さんに待ったをかけた。「あつ、ちょっと待って。迷惑かけちゃったし、飲み物で

も奢るよ」

「……いらぬ」

「いやいや、それじゃ俺の気が済まないよ。座つてて。すぐ買つてくるから」

断る冬島さんを押し留め、カバンを持って教室の出口へ駆け出す。

本番はこれからだ。

時間がかかった分、楽しませてもらわなければ。

俺はそのまま廊下に出て、ドアの影に隠れる。

そしてカバンから用意しておいたペットボトルを二つ取り出した。

一つはお茶、もう一つはコーヒー。

どちらも内容量が二百八十ミリリットルの、いわゆるミニサイズだ。

二本とも家にあったものだが、お茶の方には細工を施しておいた。

もちろん細工とは……、渴望のエキス^グの混入だ。

混ぜ込んだ量は二十ミリリットルで、見た目だけでは何も違いが分からない。

説明書によれば十ミリリットルにつき精飲一回らしいから、これを飲み干してもらえば俺は二回の射精を楽しめるらしい。

ちなみに自分でもちよつと舐めて、人体に有害でない事を確認済みだ。

水と区別がつかないくらいの無味無臭だったし、飲んで気分が悪くなるという事もなかった。

女の子に飲ませるのだし一応、と試してみたが、アイテムの有用性も分かったし、やつておいて良かったと思う。

まあ、おかげで量は少し減つてしまったけれど……。

「……おまたせ」

「ん」

少し時間をおいてから、再び教室に入る。

冬島さんは普通に廊下の端にある自販機まで行ってきたと思つたのか、やはり興味のなさそうな顔だ。

俺はそんな冬島さんに近寄り、お茶を差し出した。

「はい。なんか自販機の調子が悪いみたいで、ちよつとぬるいかも」

「そう……ありがと」

「どういたしまして」

礼を言う冬島さんに、優しく笑顔を返してやる。

礼を言いたいのはこちらの方だ。

これから冬島さんがしてくれるであろう事を思うと、本来ならお茶の代金の百倍くらいは払ってあげるべきなのだから。

俺は自分の飲み物の封を開け、ごくごくと飲み干している。
く。

こうすれば冬島さんも飲みやすいはずだ。

そしてその目論見通り、冬島さんはすぐにペットボトルの蓋を開ける。

「……？」

かすかに違和感を覚え、疑問符を浮かべる冬島さん。

すでに一回開けたものだから、新品とは手応えが違ったのだろう。

しかし冬島さんは気にしない事にしたのか、そのまま蓋を完全に開け——

「んっ……んっ……んっ……」

可愛らしく小さく鳴る冬島さんの喉。

そのままペットボトルの中身はどんどんなくなっていく。飲むペースをこちらに合わせてくれたのだろう。

自分だけ飲むのが遅いと俺に悪い、とか思ったのかもしれない。

あるいは単純に喉が渴いていたのか。

俺はそんな冬島さんを横目で見つつ、自分のペットボトルを空にした。

そして、空き容器を捨ててくるよ、とばかりに冬島さんに手を差し出す。

冬島さんはその催促に急かされ、一気に残りのお茶を飲み干した。

「ん……ごちそうさま」

口元を軽く拭いつつ、俺に空のペットボトルを渡す冬島さん。

俺は内心でガッツポーズを取りながら、その空き容器を受け取った。

これで、渴望のエキスを二十ミリリットルは、全てが冬島さんの身体の中に入った。

あとは効果が出るのを待つだけだ。
……そして異変は、すぐに訪れた。

「……………ねえ、斉野くん」

自分から話しかける事の滅多にない冬島さんの口から、俺に向かって声がかかる。

俺はそれに心臓が跳ねるのを感じながら、何気ない風を装って応えた。

「ん、なに？」

「飲み物、もっと欲しい」

「……そう、じゃあまた買ってこようか？」

「買わなくていい。そういうのじゃない」

こちらの提案を拒否し、淡々と言葉を続ける冬島さん。
俺は冬島さんが何を言いたいのかを理解しつつも、何も

知らない演技を続ける。

冬島さんはそのまま無表情に、俺の方を指差した。

その指の先にあるのは、もちろん――

「斉野くんの精液、飲ませて」

俺の股間を指差しながら、冬島さんの口から出る淫らなお願ひ。

しかしその表情にはやはり一切の感情がなく、恥じらいも全く見られない。

もしかして自分が言ったセリフの意味が理解できていないのだろうか。

『渴望のエキス』には、そういう効果もあるのかもしれない。

「分かった、良いよ。冬島さんには勉強教えてもらっただけだし」

「ありがと」
とんでもない会話の内容とは裏腹に、交渉は淡々と終わる。

なんだか不思議な気分だ。

冬島さんらしいと言えばらしいけれど、まさかこういう会話までクールにこなしてしまうとは。

……まあ、こういうドライな関係も嫌いだはない。

俺は自分の椅子に腰掛け、冬島さんと座ったまま向き合っ
つてズボンのチャックを下ろす。

そして期待で硬くなった肉棒を空気に曝した。

「ん……」

勃^ま起した肉棒を見て、冬島さんが僅かに吐息を漏らす。

その手はゆつくりと俺の股間に近づき、躊躇なく竿の部分を握った。

(……これだけで、もう気持ちいいな)

ただ握られただけなのに、背筋がゾクゾクしてしまふ。自分のとはまるで違う女の子の手の感触。

柔らかいし、指が細い。

そして握り方も違っていて、それがとても新鮮な感じだ。しかしその手は、なかなか動き出してくれない。

ただ握っているだけだ。

「……………どうすれば精液が出るの？」

眉を軽くひそめ、珍しく困った表情を浮かべる冬島さん。どうやら手が止まっていたのは、どうすれば良いか分からなかったかららしい。

性的な事に関してはかなり疎いようだ。

経験はおろか、そういうのが載っている本やサイトも見
た事がないのかもしれない。

「握ったまま上下に動かしてくれれば、そのうち出ると思
う」

「……………こう？」

「っ！　そ、そうそう、そのまま続けて……！」

俺の指導に従い、冬島さんが手コキを開始する。

小さな手が俺の肉棒をたどたどしく往復し、俺はその快感に思わず息を呑んだ。

信じられないくらい気持ちいい。

女の子に肉棒をしごいてもらうのは、こんなに良いものだったのか。

もちろん春町先生のアソコも最高に良かったけれど、これはまた違った素晴らしさがある。

刺激としては自分でしごくのに近い。

けれど手の大きさも、柔らかさも、力加減も……全てが優しく、ぎこちなくて、心地よい。

それに自分で手を動かす必要がないから、快樂だけに集めることができる。

そしてなにより最高なのが、目の前の光景だった。

（あの冬島さんが、俺のモノをしごいてる……！）

いつもクールで冷めている、完成された美貌を持つ冬島さん。

しかしその冬島さんは今、俺の肉棒を握って初めての性奉仕をしている。

誰もが憧れるような高嶺の花が、射精をさせようと俺に夢中で手コキをしているのだ。

「くっ……！」

「……痛かった？」

「い、いや、その……気持ちよすぎて……」

「そう。続けるね」

思わず限界が近くなつて歯を食いしばると、冬島さんはしごきを中断して俺の顔色を窺ってくる。

しかしすぐ説明に納得し、手の上下を再開した。

「……出そうになつたら言つてね。飲むから」

冬島さんが手コキを続けつつ、俺と視線を合わせて宣言する。

当然といった感じの顔だ。

やはり精液を飲む事に抵抗はないらしい。

俺は頷き、そのまま快感に身を任せて限界への階段を上つていく。

冬島さんが飲んでくれる事を思えば、オナニーとは比較にならないほどの量が放出できそうだ。

「んっ……んっ……んっ……」

冬島さんの口から、少し乱れた呼吸が漏れる。

どうやら腕を動かすのに疲れてきたらしい。

しかし手コキが止まる様子はない。

一刻も早く、俺を射精に追い込みたいのだろう。

そしてそんな冬島さんの姿は、精神的にも俺の快樂を増

幅させる。

いつも静かで汗をかいている所も滅多に見せない冬島さんが、俺を悦ばせるために呼吸を乱している。

普段の無表情も僅かに崩れ、ストレートの黒髪も揺れて落ち着かない。

完璧な美貌が少しだけ乱れ、強烈なセクシーさを醸し出していった。

「ふ、冬島さん……そのまま続けて……！ もうすぐ、出るからっ……！」

「ん、分かった……んっ、んっ……」

俺の宣言に、冬島さんは懸命な手コキを続ける。

最後の瞬間は、もうすぐそこだ。
本能的にそうした方が良くと分かったのか、冬島さんの手は俺を追い詰めるように動きを速めてくる。

俺の肉棒はその狙い通り、限界に向けて高まっていった。そしてもう我慢が効かなくなってきた俺は、冬島さんに向けて切羽詰まった声で指示する。

「うう、くっ……冬島さん、で、出るよ、準備してっ……！」

「ん……いつでもどうぞ」

上半身を倒し、俺の肉棒のすぐ前まで口を近づける冬島さん。

つていく。

そしてついに――

「で、出るっ！ 冬島さんっ!!」

「あむっ」

「ううっ!!」

ドクッ！ ドクッ！ ドクッ！ ドクッ！

亀頭が温かい感触に包まれ、その瞬間、快感が爆発する。圧倒的な放出感。

精液が大量に吐き出され、その全ては冬島さんの口内に注がれていく。

しかし冬島さんは決して口を離さない。

この精液は全て、冬島さんが求めてやまないものなのだ。俺は思わず冬島さんの頭を乱暴に撫で、その黒髪を思うままに乱しながらそのまま射精を続けた。

「ん……んくっ、んっ、ん、んく……」

散発的な放出が一段落した所で、冬島さんの喉が鳴り始める。

少し飲みづらそうだ。

しかし冬島さんは肉棒を咥えたまま全てを飲み干し、そして素晴らしい事に、肉棒を強く吸って尿道に残った精液も飲み込んでいく。

俺はその最高のサーピスに酔いしれながら、心の中を多



幸福感でいっぱいにした。

信じられないほど気持ちよかった、冬鳥さんの手コキと精飲。

けれど、まだ終わりではない。

飲ませた。渴望のエキスは二十ミリリットル、つまり射精二回分。

つまりあともう一発、冬鳥さんに奉仕をさせる事ができるのだ。

(よし、次は……！)

俺は自分の股間に顔を埋める冬鳥さんを眺めながら、期待で性欲をすぐに復活させる。

肉棒も、依然として硬い。

次の一発も問題なく出せそうだ。

「ん……」

俺の内心など知る由もなく、冬鳥さんは自分の喉を撫でて少し顔をしかめる。

どうやら喉に引つかかって気持ち悪いらしい。

俺としてもだぶ濃厚なが出た気がするから、その表情には納得だ。

しかし冬鳥さんは、すぐにその仕草をやめて俺を見た。

「……もう一回出ない？」

少しの恥じらいもなく、俺に次の射精を催促する冬鳥さ

ん。

目論見通り、やはり一回の精飲では満足できなかったらしい。

手が俺の肉棒を再び握って、様子を見るように優しい手コキをしてきている。

俺はそんな冬鳥さんに、わざと困ったような笑みを作った。

冬鳥さんに手コキしてもらえるなら、二回連続でも十分に射精できる。

しかし、また同じプレイをするのもつまらない。

やるとしたら、さらに過激な行為が良い。

「さっきのくだいぶスツキリしちゃったから、次は出にくいかも」

「……そう。どうしたら出る？」

俺の言葉に対し、冬鳥さんはすぐさま質問を返してきた。クールだが積極的な態度だ。

俺は内心の興奮を隠しつつ、その問いに答える。

「しゃぶってもらえれば出ると思う。あと、冬鳥さんが裸になつてくれればもっと良いかも」

「……………」

俺の要望に対し、動きを止める冬鳥さん。

要求が過激すぎて、渴望のエキスがあつてなお理性

がストンプをかけたのだろう。

俺はそんな冬島さんに、さらに言葉を続けた。

「あとは、触っても良いならもつと早く出るかな。でも一番良いのは挿入だね。かなり簡単にうちやうはずだよ」

少し冗談めかしつつ、本番まで提案する。

どの程度まで許してくれるのか分からないが、俺としてはやれるならやりたい。

冬島さんはどんな言葉を聞いても無表情みただし、言うだけならタダだから言ってみた。

「……………」

冬島さんは肉棒を握っていた手を離し、自分の顎に当てて考え込む。

視線は俺の股間に固定されたまま。

俺の精液を飲みたいという欲求にどこまで従うか、悩んでいるのだろう。

そして三十秒ほどして、冬島さんの口が動き――

「触られるのは、嫌。入れるのもダメ」

……………少しだけ意外な結論。

どうやら冬島さんは、精飲を早く済ませる事より自分の身体を大事にする事を選んだらしい。

今まで全く恥ずかしがってこなかったし、性行為に関してもハードルが低いのではないかと思っていたのだが……………。

しかし冬島さんは感情のない顔で、でも、と言葉を続ける。

「でも、しゃぶるのは大丈夫。裸も平気だと思う」

「えっ、それはいけるんだ」

予想外の妥協点の位置に、思わず驚きの声が出てしまう。貞操を守る方向に行ったかと思えば、服を脱ぐのはOK。フェラをするのも問題ないらしい。

◦欲望のエキスの強制力は、そのくらいまでを可能にするものなのかもしれない。

「その代わり、早く出して」

「わ、分かった」

「……………じゃあちよつと待ってて」

冬島さんはそう言うと、制服のボタンに手をかける。

そして躊躇なくそれを外した。

そのまま冬島さんは脱衣を続け、白く綺麗な肌が次第に空気に曝されていく。

（すぐく高そうな下着だな……………でも、胸はやつぱり小さい）

露わになったブラジャーを見てそんな感想を抱く。

冬島さんの下着の色は、純白。

レースや刺繍がふんだんに施されていて、一見して高級なものだと分かる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>